長野県国語国文学会・松本大学共催　特別講演会

光源氏とは何か、「源氏物語の世界」

講師　東京大学名誉教授
秋山　虔氏

腰原先生とは古いお付き合いですが、前にも先生のお呼び出しがあって、松本には参上したことがあります。この年寄りに、特に新しい見解があるわけでもございませんのですけれど、一時間ほどお話させていただきます。

源氏物語のおもしろさは、先生方がたくさんいらっしゃるので、申し上げることもないのですけれど、一行一行、片言隻句を吟味しながら読んでいきますと、他の作品では考えられないような魅力が引き出されるということです。よく「神は細部に宿りたまふ」といわれますよね。敬語だとか、「てにをは」とかに注意しながら読んでいくと、行間の深い意味合いを汲みあげることができる。時間があればそういう読み方をしていきたいのですけれど、今日は大雑把な概説となってしまうことをお許しいただきたいと思います。

「光源氏とは何か」ということですけれど、光源氏が登場する前にはその前史がございますね。光源氏の母の桐壺更衣が身分不相応に帝の寵愛を独占したばかりか、この世のものならぬ皇子を産んで、そのために死に追い込まれていくという経緯が語られているのですが、昔の注釈の中に、光孝天皇の女御の藤原沢子という人が、天皇の寵愛をこうむっていたけれど、急に病気になって退出し、間もなく死去したという事実が、引き合いにされているのですが、桐壺の巻における、帝と更衣の関係のような史実は探りにくいのです。とにかく、現実にありふれたものではない関係ですから、作者はご存知のように白楽天の長恨歌を引き合いにしてこの物語の進行の、いわば磁場を設けているわけです。物語というものは、実はありそうもないこと、あるいはあってはならないことを、そうであるがゆえに語り伝えようとするのです。とにかく、源氏の世界は尋常の尺度を持っては図りがたい、そういう状況から開始したということです。この世界は、異常であるがゆえにどこまでも異常な経過を誘発しつつ進行する。言葉の力によってそうした世界を押し拓いていく、そのことによって、日常においては隠蔽されている理路が顕わになってくるわけです。現実にはあり得ない世界であるがゆえに、その世界は破滅していかざるをえない。そこに物語られる世界の現実感が確保されるわけです。現実にはありえないような世界に現実感を持たせるためには、そういう世界がいかに矛盾をはらんで敗北していくかということで、そこでリアリティが確保されていく、そういう仕組みでございます。

帝と桐壺更衣の稀有な関係は、やがて更衣の死を結果しますが、いかにも、そうなるほかありえない、それが現実の理路というのであろうと思います。そうした二人の間に生まれた第二皇子、光源氏は、母を死に追い込んだ現実によって受容されるはずがない。この第二皇子はどのように生きていくのか。後ろ盾のない源氏は、自身の資質の発揮によってしか生きていけないわけです。「さきの世にも御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉のをのこみこ」として源氏は誕生しました。さきの世の御契り、この世の論理では説明がつきかねるということです。「きよら」とか、「玉のをのこみこ」の「玉」とか、この言葉がどれほど高貴なことを意味するかは、申すまでもないわけですが、とにかく、一日も早くこの皇子を見たいという帝のもとに急ぎ参らせたところ、その帝の目に「めづらかなるちごの御かたちなり」とあります。「めづらか」という言葉には、よくぞこのよ

うな子がという、感動がこもっているのですね。そういう資質が、天性のものとして与えられている、これは物語の主人公に伝統づけられた約束事だといいましても、光源氏の場合は、それこそが彼を受け入れることができない現実に切りこんで、現実を克服していく力でもあったというわけです。

この第二皇子は、単に称揚されているばかりではなくて、比肩すべくもない存在として第一皇子（朱雀院）が引き合いにされている点も注意されることです。というのは、この第一皇子の存在に家運をかけている右大臣家を脅かす危険な存在がこの第二皇子であったということであります。当然、第二皇子の側としてまた危難にさらされていることでもあるわけです。日本の古代史を省みますと、皇位継承権をその身に保有する、有能な皇子たちの受難史だといえましょう。有間皇子とか大津皇子だとか、そういう皇子たちが抹殺されていきました。皇位継承権を持っているが故に政争の犠牲になりました。ですから、光源氏が親王宣下を受けずに臣籍に降って源氏の姓を賜ったということは、帝の判断としては、この卓越した皇子こそ、皇嗣たるのにふさわしいと判断されるだけに、危難にさらされることのないよう臣籍に降下させたのだといえましょう。しかし、この第二皇子は皇位継承権を失うことによって、むしろ、超越的な独自の人生を歩む人間像を際立たせることにもなるわけです。

極端というほかないくらい、理想化されている光源氏について、こういう人物には共感しがたいという意見がずいぶん多くの人々によって主張されてきました。しかし、常識では律することのできない超人間であることと見合うような形で、そうしたありようを押し揺るがすようなこれまた常識では律しえない経験を運命付けられている、それが光源氏の人生だと思うのです。そういう光源氏の人間像に対して、我々は自分たちと等身大であることを要求するのはやめるべきだろうと思います。かえってありきたりの我々の尺度を跳ね返すような、それが源氏物語の主人公の個性であるということを認識したいと思います。

そのような稀有の個性としての人生の原点は、申すまでもなく、父帝の最愛の后である藤壺の宮との密通です。源氏と藤壺はそれぞれ「光君」、「かかやく日の宮」と称されますが、源氏が藤壺に吸い寄せられ、ついに契りを交わす仲となった、そのいきさつに立ち入るまでもなく、二人は、まさにそうなるほかない不可抗力に運ばれていったということだと思います。しかしながら、そういうきわめて自然な成り行きが、それぞれ己れの存在の問われるタブーを犯してしまったということです。この密通の結果として生まれた、源氏に生き写しの冷泉院が、あたかも源氏の身代わりとして皇太子になり、やがて帝位に上るわけですけれど、そのことが、父としての源氏に無類の栄華を保証することにもなるわけです。こういう点、戦争中に、源氏物語が不敬文書として排斥されたところであります。小学校六年生の教科書ですが、若紫の巻の一部が易しく書いてあるわけですけれど、それが槍玉に挙げられたんですね。昭和十三年でした。

光源氏の輝かしい生涯における最悪の経験は、須磨明石への流離です。いったい光源氏の臣籍降下は、先に申しましたが、その安泰な境涯を祈った父帝の配慮によるものでありまして、また、光源氏が左大臣家の葵の上を正室にすることになったのも、これは、左大臣家という強大な権勢を後ろ盾とすることの安泰が望まれたからでもあります。しかし、そのことが左大臣の政敵の右大臣、弘徽殿方を敵に回すことになる。これは余儀無い事態です。ことに、源氏が、こともあろうに右大臣の六の君、これは朱雀帝のもとに入内が予定されていた朧月夜という人ですが、この女君と割りない仲になったのは運命的とでもいうべきでしょうか。朧月夜は、源氏の子（冷泉院）をもうけたけれども、そのためにかえって再び近づきがたい高嶺の花となった藤壺への切実な渇きを癒すかのように、源氏の前に立ち現れた女性なんです。朱雀院の治世になって、朧月夜が尚侍となって宮中に出仕し、そして右大臣、弘徽殿の専横下、源氏や左大臣たちが逼塞を余儀なくする時世になっても、むしろそういう時世においてこそかえって二人の関係は情熱的に続けられたといえましょう。そういう関係が発覚し、右大臣弘徽殿方をして源氏追放の策謀に走らせたわけです。

源氏は朝廷に対する謀反人に仕立てあげられようとするのですけれど、朧月夜と源氏が契ったために罰せられるということではないのです。朧月夜は尚侍なんですね。女御・更衣は、帝の妻になるわけですが、尚侍というのは内侍司の長官です。実質的には帝の妻と同様ではあるものの、公的には尚侍というのは公務員なんです。ですから、朧月夜と源氏が契ったからとて決して処罰されるべきことではないんですが、右大臣方にとっては打撃でありますから、源氏を謀反人に仕立てようとして、いろんな策謀を企てるわけです。藤原氏が権勢を拡張していくためにはですね、そういう方法で邪魔な存在を謀反人に仕立てて葬ってきました。応天門の事件や菅原道真の左遷、それから、源高明を追放した安和の変などもそれにあたります。濡れ衣を被せられて、政治生命を抹殺された有能な人たちがたくさんいます。これは藤原氏の常套手段だといってもいいわけですけれど、光源氏を罪人として追い落とすのも右大臣家の策謀によるといってもいいわけです。余談になりますけれども、罪という言葉はずいぶんいろいろな位相がありますね。法制上の罪、人倫に違背する罪、仏教上の罪、それから罪もないねという言い方がありますね、悪気がないという意味でしょう。そういういろんな位相があるわけですけれど、源氏の場合は、これは右大臣家が陥れようとして、謀反人として源氏を断罪した。源氏にすれば無実の罪だと思うのですけれど、内心では藤壺との密通の結果として自分が受け入れなければならない罰だという意識がありました。

それはそれとして、王朝の歴史における一世源氏の左遷というのは醍醐天皇の皇子であった源高明の場合が唯一の例です。光源氏は高明を連想させます。しかし源高明は都に召還されたものの、政治生命は断たれました。中宮定子の兄弟だった藤原伊周とか隆家とかも流罪にあい、都に帰ってきてからは政治生命は断たれました。ところが、都に帰ってきた光源氏は、朱雀院にとって代わる冷泉帝、というのは源氏の実の罪の子ですが、その治世を領導する重鎮になります。これは省きましたけれど、六条御息所という源氏の愛人、この人の生霊に襲われて源氏の正室葵の上は死に追い込まれたのですが、この御息所と、今は亡き前東宮との間には娘がもうけられていまして、朱雀帝の治世には斎宮として伊勢に赴いていましたが、冷泉帝の御代になって都に帰還しました。源氏は六条御息所の遺言に従い、この人を養女として冷泉帝のもとに入内させました。斎宮女御と呼んでおきましょう。冷泉帝の後宮にはすでに権中納言(かつての頭の中将)の娘が弘徽殿女御として入内していたのですけれど、その弘徽殿女御を押しのけ、やがてこの斎宮女御を后の位にまで押したてます。

そういうことで緊密に冷泉帝との関係を取り結ぶことによって、源氏の栄華の基礎は固められていくのですが、その一方で源氏は流寓の時期に、明石の君との間にもうけた娘をお后候補として養育し、朱雀院の皇子である東宮に入内させるのです。こうして源氏は、水も漏らさぬ深慮遠謀によって、超越的な権勢を盛り上げることに成功します。賜姓源氏でありながら、あたかも摂関家のごとく繁栄するということは、当時の史実としてはまったくありえなかったということはともかくとして、このような源氏の栄華追求はどこまでも源氏物語の世界の文脈の中でしか了解し得ないと思います。言葉を紡ぐことによって、現実とは違った、ひとつの虚構の現実を創りあげていったというわけです。

ところで、源氏が六条御息所の娘を入内させて、権中納言の娘の弘徽殿女御を圧倒したということを申しましたが、その詳細が語られるのが、絵合の巻です。当時は歌合せ、または物合わせというものが流行しましたけれど、絵を合わせるという例はないのですね。紫式部が初めて源氏物語の世界でつくりあげた物合わせなのです。これは、帝がたいへん絵についての趣味を持っていらっしゃるというので、弘徽殿女御方は盛んに絵を収集するわけです。名人たちに絵を描かせるのですね。そうすると帝はたいへん喜ばれるのです。源氏は対抗して、古い絵を自邸の蔵から探し出して、それを帝に拝呈させる。そんなわけで、やがて絵合わせが行われることになります。竹取物語とか、正三位物語とか、宇津保物語とか、そういう物語を絵に書いたものを双方で合わせて勝敗を決めるのですが、その絵合わせに、源氏は須磨で描いた絵日記を提出することによって、相手を圧倒した

わけです。この絵合わせは単に風流の遊びじゃなくて、権力争いなんです。絵合わせに勝つことによって、帝を自分の側にひきつける、そういうことなんです。で、絵合わせに勝利して源氏の権勢は一段と強化されます。

ところが、そういう栄華への道を拓き歩むことを惻惻と恐れる不安を源氏は同時に抱え込むことになります。この絵合の巻の最後のところで、この栄華はどこまで続くかわからないのだから「しづかに籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べむ」という願いから山里、嵯峨の地に御堂を造営したとあります。この御堂は、今、清涼寺に釈迦堂がありますけれども、それがモデルになっているといわれております。源氏は、月ごとの十四、五日、それから晦日の勤行を己れに課したとありますが、そうした源氏の心中には後生を頼む願いが培われていたということです。このような源氏の道心は、自分の栄華が藤壺との密通を土台とするものであるということへの痛切な自覚にもとづくのではないかと思われるわけです。その源氏にとって、その人あっての人生だといっていい藤壺が亡くなります。そしてまもなく、藤壺の夜居の僧から帝への密奏があります。おそらく藤壺は、この夜居の僧に対して自分の秘密を全部打ち明けていたのですね。そして懺悔していたのでしょうが、たまたま世の中に、左大臣が亡くなったとか、いろんな凶事が起こり、それは、そういう秘密のせいであろうと思って、夜居の僧が秘密を帝に奏上します。帝は初めて自分が、藤壺と源氏の罪の子だとご存知になるわけであります。帝は中国の古典を勉強するとか、日本の歴史をたずねるとかいろいろ考えた上で、実父の源氏に位を譲ろうという内意を示されるわけですが、源氏は受け入れないのです。それなら太政大臣にという帝の意向をも受け付けないのです。源氏は内大臣だったのですが、実務官僚として自分の権勢を強化することが先決だったのですね。斎宮女御の立后を成就させ、后の実家ということで不動の盤石を固めた、その時、実務のない太政大臣という地位におさまったわけです。一歩一歩、慎重に我が体制を造成していったといえましょう。

よく、光源氏は女性を追い回しているプレイボーイだと言われていますが、そういうものではございません。時世を読んで、適切に手を打って自分の地歩を固めていく、そういう実務官僚としての能力は抜群なんです。そうして安定した地位の象徴として建設されたのが、四季の町よりなる六条院です。これは、今の敷地面積でいえば二万坪くらいの大邸宅ですね。中宮（斎宮女御）の母であった六条御息所の邸が六条にあったのを取り込んで、押し広げ造成されたものでして、その秋の町は中宮が宮中から退出して住む区域であります。源氏は藤壺の形代として早くから迎え入れ、長年の伴侶として人生を共有してきた紫上とともに、春の町に住むわけですね。夏の町が花散里、冬の町が明石の君にそれぞれに当てられました。そして、季節の推移とともに余人の追随を許さないような雅びの文化の営まれる空間がこの六条院であります。源氏はやがて準太上天皇という位に上りつめます。そして、この六条院に、冷泉帝と朱雀院上皇の行幸を仰ぐという極上の栄誉に浴することになります。これが第三十三帖の藤裏葉の巻の大団円ですね。第一部の終わりであります。

いったいこの六条院の世界において人々はどう生きたのか。源氏は関わりを持った女性を捨てないで、ひとつの邸に迎え入れて愛情を注いだのだから、女性にとっては理想の世界だなと考えたこともありましたけれど、どうもそうは考えられないと思います。源氏物語研究史の上でたいへんな業績を残した三条西実隆という人は、正月の読書始めには源氏物語の初音の巻を読みました。初音の巻には、源氏と紫上を中心にした六条院の世界が極楽浄土のように美しく語られているのです。「生ける仏の御国とおぼゆ」と書かれているのですけれど、こういう世界秩序が保たれるためには、その世界に組み込まれて生きる女性が、あるいは光源氏自身すらも、人間性に反するような規律に厳しく縛り上げられる、そうでなければ、六条院の秩序を保っていけないということです。例えば、源氏の唯一の娘、明石の姫君は、明石の君のような受領の娘が母親であっては、未来の后になるための障害となるというので、もっぱら紫上に養育されているのです。母子は別々に引き裂かれて住まわされ、交流は許されないんです。やがて明石の姫君は東宮のもとに入内することになりますが、その成人式にも、明石の君は出席することができないんです。身分の低い母親が顔を出したら、姫

君の格が下がるということなんです。光源氏は母親に成人する娘の姿を見させてやりたいんだけれど、六条院の秩序が許さないということで、源氏はそういう願望を自分自身で抑えていかなければならない。それは一例ですが、そのようにして六条院に生きる女性たちはこの世界の秩序を守るためには、たいへんな規律に服従しなければならない。はたしてそれが幸せなのか、という話になりますよね。

それから、六条院の世界はですね、時の推移とともに次の世代がそれぞれの生き方を示しながら物語の世界の表面に進出してきます。例えば、夕霧は源氏の長男ですが、源氏の生き方に対して批判的な姿勢を示し始めるんですね。現在の親子関係を想わせるといえましょう。とにかく、次の世代の批判にさらされて生きる。つまり自分が作り上げた世界が、計り知れず偉大であり壮麗であればあるほどに、これを保持していくために絶大な心労が、これまた計り知れないものになっていくということです。

光源氏の栄華の極みの称揚されるのが第三十三帖の藤裏葉の巻で、先刻申しましたが、六条院に冷泉帝と朱雀院上皇がお揃いで行幸されます。ここで、第一部の幕が下ろされるわけです。この藤裏葉の巻の次の若菜の巻というのはたいへん長大な巻ですから、上下二巻に分けられています。その若菜の巻になりますと、それまでの栄華の世界が揺らぎ始めます。朱雀院が健康思わしくないのです。院は出家したい。仏にお仕えし、心身の平静を保つことによって、まだ寿命が延びるかもしれないのですね。ところが、出家するとなると、あとに残される女三の宮という最愛の内親王の身の上が心配です。あれこれと思い悩んだ朱雀院は、結局女三の宮を光源氏に委ねることになるのですが、そこに行き着くまでのいきさつは、まさに、そうなるほかあり得ないような、必然性が紡がれていくといった文体なのです。そこでは、光源氏は、むしろ後景に引き下がっていて、そういうなりゆきを否応なしに受け入れさせられる、そういう呼吸に注意したいのです。

女三の宮の輿入れによる六条院の世界の動揺は、余儀ないことです。それまで、紫上と光源氏は絶対的といってもよい絆で結ばれていたわけです。その二人の間に女三の宮が介入して来るという事態に、紫上はどう対処するか。藤壺の姪であった紫上は、藤壺の形代として源氏に迎えられ、藤壺が亡くなった後は、自身の才覚で源氏と深い信愛の関係を培い、六条院の他の妻たちを引き離す、絶対的存在となっていったわけです。そういう紫上ですから、明石の姫君の養育をも源氏は依頼できたわけです。その紫上が、まるで女御が入内するような大々的な儀式でもって女三の宮が六条院に輿入れしてくる事態に対して、どのように対処したか。紫上は周囲の取りざたを制止して、上機嫌に振舞うのです。そして新しい光源氏の結婚に対して協力を惜しまない。いかにも、好意的に女三の宮を迎え入れたわけです。それがこれまで源氏と共に生きてきた妻としての誇りだったといえましょう。

六条院の秩序は、自己を抑制した紫上の知恵によって保たれていたといえましょう。ですから、内親王であり、また東宮の妹宮として格の高い女三の宮が六条院に迎えられて重んじられたのは当然ですが、これはあくまでも表向き、実質的には紫上の人望は絶対なのです。そのために源氏の愛着も日増しに深まることになるわけです。源氏は女三の宮を迎え入れることによって、紫上の価値が今更ながら認識されたといえましょう。しかし紫上にとっては、これまで信愛を培ってきた源氏との関係は一体何であったのかということになるのです。

藤裏葉の巻において、東宮に入内していた源氏の唯一の娘である明石の姫君が、未来の東宮になるであろう男御子を産みます。源氏の幾久しき栄華が約束されるわけです。これはまさに、その姫君をお后候補として養ってきた紫上の功績ですから、紫上はどこまでもあがめられますが、紫上自身はその姫君の生みの親ではないのです。一方、明石の君はおとしめられながらも、未来のお后になる人、未来の国母になる人の生みの親なのですから、だんだんと六条院の世界に重んぜられていきます。ところが、紫上はあがめられるけれど空虚なんです。そういう紫上に対して、源氏の愛情は、ますます深まるのですが、紫上の心情との間には、明確な落差があります。

源氏が女三の宮に琴(きん)という楽器の演奏法を伝授する条があります。源氏物語の時代には、これを演奏する人はいないくらい高貴な楽器なのですが、その演奏法を女三の宮に熱心に伝授したのは宮の父の朱雀院の五十算賀の日に、この宮の琴の演奏をお聴かせしたいということだったからです。それに先だって六条院の女性たちが一堂に会して、音楽の合奏の会を催すことになりましたが、まさに六条院文化の無類の達成がそこで証されるわけです。源氏は専門の楽師も及ばないその女性たちの演奏を聴きながら、自分が培った六条院文化がこんなにもすばらしいものかと今更ながら実感したわけです。ところが、この催しの直後に紫上が発病しますから、これはまさに落日の前の輝きだったと言ってもよかろうと思います。紫上は六条院を去って、二条院で養生する身となり、その看病に余念なき源氏がおのずから不在がちな六条院において出来したのが、柏木と女三の宮の密通なのです。ために、女三の宮は懐妊します。やがて、不義の子薫が生まれる。女三の宮は出家し、柏木は自分を死に追い込むようにして世を去るわけです。その柏木に先立たれた正妻、落葉の宮が、柏木の遺言を守って律儀な世話役をしていた夕霧に迫られ、その側室にさせられる。そういう経緯が紫上の心にどう反響するか。女性の悲運というものへの嘆きが切々と語られています。女は女として生まれたがゆえに、人間としてまともに生きることを放棄しなければならないのかという思いなのですね。

世間では、紫上は「幸い人」と呼ばれています。「幸い人」というのは、こんな幸せがあり得るのかという幸せを生きた人のことですが、しかし紫上は、そういう立場でありながら、女であるために人間として自然に生きることができなかったのを恨んでいるのです。その紫上の死は、光源氏の人生の終焉でもありました。哀傷の一歳を過ごした源氏は、物語の世界から退場することになります。

六条院に女三の宮を迎えた後の光源氏は、およそ物語の世界を開いていく主導的な立場を失っているといってよいと思います。次の世代が銘々にその生き方を提示しながら登場してくる、中心のない世界になってしまっているといえます。源氏は手をこまねいている。あの柏木と女三の宮の密通の結果として生まれた薫を、我が子ならぬ我が子として、衆人の前で抱き取らされている、その屈辱。源氏は、かつてのわが過ちの因果応報だと考えます。そして現世でこのような報いを受けたからには、来世において免れがたい必罰も多少は軽減されるだろうかとまで考えている。こういう源氏の有り様は、この世で極めた無類の栄華と見合う、これまた無類の苦悩を示す姿であるというほかないと思います。これはやはり、誰しもの共鳴を受け付けないような超人間的な苦悩といってよいと思います。物語中で源氏がしばしば自分の人生を回顧し、総括しているのですが、その根本には底知れない嘆きがこめられています。いかなる富も名声も無常を生きる人間の魂を救済するものではないということを、読者は教えられるわけです。源氏は、自分は異常な人生を生きた、幸せな人生を生きた、でも同時に誰もにわかってもらえないような苦しみを自分は抱え込んで生きてきたということを訴えているわけです。そういう源氏は、紫上に先立たれた後、もう出家の道しかないのですが、その道が坦々として開けているとは、どうも受け取りにくい。これまでもずいぶん源氏は、後生のことを考えて、いろいろとお勤めしてきたのですが、俗世の絆が発心の妨げとなったということが語られています。じつは紫上にとって一途の願いであった出家への道が阻まれたのも、源氏の執着ゆえでしたが、そうした源氏をむしろ、高いレベルから憐れんでさえいるのが紫上でありました。

源氏の底知れない愛執が紫上の後生の救済を妨げることにもなるだろうと私は理解しています。源氏の神妙な勤行によってどれだけ紫上への執着が昇華されるか。なだらかに出家への道を進めるかどうか。また、出家したからといって、これからを見通すことができそうもないわけです。紫式部日記に、自分は出家するよりほかに道はないと言っているのですが、出家したからといって、「雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる」とあるのです。「雲に乗る」ということは、阿弥陀様が雲に乗って来迎して自分を極楽浄土に迎え入れてくれるということです。出家したから

といって、悟脱の境地に至りえないのだから、阿弥陀様に迎えられる保障はない。だから出家できないのだということを述べているわけです。そのことを考えると、紫上にしろ光源氏にしろ、果たして後生で極楽に迎えられたのだろうかということを考えるわけです。

光源氏の生涯の終わりは、重い課題を後の世の人たちに残したわけで、これを受けて語られるのが宇治十帖なのですが、己れの生まれの秘密を感じ取って、現在を仮の世と観じ、後生への願いに生きることを身上として登場した宇治の物語の主人公は、柏木と女三の宮の罪の子薫です。薫は、先達として宇治の地に隠棲する八の宮のもとに通って、やがてその宮の娘の大君と世間の男女の仲らいとしてではなく、反世俗の思いを共有する者同士の交わりであろうという意識を押し立てて、交わりを求めるのですが、そういう願望がいかに脆弱であるかを思い知らされることになるのです。大君は薫の押さえがたい欲望に心を閉ざすわけです。世間普通の人間とは別格の存在として薫を敬愛してきたこれまでのうるわしい関係が潰えるであろうことを恐れたからです。こういう大君の意識には、なまじっかの結婚によって、皇族としての面目を汚してはならないという八の宮の遺言が守られていたからなのです。大君は妹の中の君を薫と結婚させて、自身はその後見として二人の幸福を願おうとしたのですが、薫は、今上の皇子の匂宮を宇治に導いて、中の君との仲を取り持った。しかし、薫の計略は裏目に出て、匂宮と中の君の結婚生活の有り様を憂慮した大君を死に至らしめるということになるわけです。薫は大君のおもかげを匂宮に嫁した中の君に求めますが、なお新たに登場してきた大君・中の君の腹違いの妹の浮舟へと思いを移していきます。その薫が一方で今上の帝の女二の宮を正室として迎え、世間の声望を集めていきます。そのことと矛盾しない形で宇治の姫君たちとの関係が語られていることは問題だろうと思います。薫の大君思慕、中の君、浮舟への執着は、どこまでも朝廷の高官としての世俗的安定が大前提なのです。むしろ、そうした世俗的に恵まれた自分自身への心情的な背反、それが宇治の姫君たちへの薫の情愛だったといってもよいと思います。平安の貴族社会の浄土信仰のありようが薫に体現されているということでありましょう。薫のそのような行動がどこまでも他者との相対関係において紡がれていくということに注意したいと思いますね。光源氏のような中心がなくなっている、この宇治の物語では、登場人物たちは互いに鏡像の関係で存在していく。相手に自分を読んでいくわけです。そうした関係構造から脱出するのが、最後のヒロインの浮舟であるといえます。薫に庇護される身になりながら、匂宮に迫られ、その情熱におぼれて、ついに両者の板挟みになって、宇治川に身を投げようとする。しかし、救い出されて出家の生活に入る浮舟は、誰しも追随することができない人物なのです。浮舟の死を嘆いて追善供養する薫は、浮舟の生存を知って、浮舟を追い求めるのですが、そういう薫の心も、浮舟の心のレベルとは違う。女の心のレベルのほうがはるかに高みにあるのです。薫は、浮舟には他に男が居るんだろうかという低レベルの憶測しかできない。浮舟はもはやこの世における人間関係から超脱しようとしている存在でもあるのです。八の宮の娘でありながら、認知されず、常陸介の後妻となった母と共に、貴族社会の外で成人した浮舟なればこそ、物語の世界の中の人間関係から抜きんでることができたのだろうと考えるわけです。

宇治の物語は、人間がそこでまともに生きていくには、あまりにも空気が希薄な印象です。光源氏を主人公として、多くの男女たちを配したかつての物語の世界は、この宇治の世界を見つめることによって、逆にその世界の栄光と悲惨が、実感されることになります。とにかく、この七十数年の虚構の物語は、一つの現代史だといえましょう。これは男女関係だけを描いた、恋愛小説などというレッテルを貼られてしまいたくありません。いかにも恋愛もあるでしょうが、主人公たちが交わる女性たちは、身分と地位と経歴を生きている人たちで、そういう女性たちと関わり合うということは、政治の世界での出世進退と関わってくるということなのです。ですから、そこに一つの虚構の現実が紡がれていくことになります。

骨格だけをお話ししましたが、最初に申しましたように、源氏の世界は一行一行がどういう「てにをは」で語られているか。どういう文脈の中で、前後関係の必然性をもって語られていくのかと

いうことを読み取っていって、その世界に抱き取られていくときに、自分たちが現在生きている現実の世界のほかに、もう一つの現実を生きたんだという実感を持つのだろうと思うのです。

今思い出したのですが、ロシア語で源氏物語の翻訳をしたタチアーナさんが、ロシアの共産党支配時代ですが、モスクワの日常生活と源氏の世界を生きる生活とは、半々だったということを日記に書いています。源氏を研究してきた日本の中世の学者たちも、現実の困窮した世界を生きる一方で、すばらしい人生を生きたのだと思います。私は、新聞で二十年かけて源氏の現代語訳を成し遂げたという方のことを読みましたが、自分の言葉で源氏を語り直す、それはもう一つの人生を生きるということに違いないと思います。新聞の投書欄には、これから源氏を自分で現代語訳をするんだ、ということを書かれていた男の方もいました。まともに源氏に立ち向かい、源氏に抱き取られるということは、もう一つの充実した人生を生きることになるということを、強調したいと思います。

（今回、本報告書に掲載するにあたり、加筆・修正を行った。）